

万博で上演される地域芸能のトランスナショナルな循環：ポリネシアンショーの自己／他者表象をめぐって

葛西 周

本発表は、万博に見られる文化の循環に着目し、海域交流と疑似観光という文脈において、万博が地域芸能をスペクタクルへと変容させるメディアとしてどのように機能したかを検討する。とりわけ、舞台化・興行化された地域芸能が万博を介していかに越境・循環し、自己／他者表象が多国間でどのように構築されたかについて、ポリネシアンショーを事例として考察する。

19世紀末以来、ハワイのフラに代表されるポリネシアンショーは各地の万博において呼び物となり、文化的真正性を演出するだけでなく、西洋の観客にとっての「他者」を象徴する役割を担った。文化進化論的な価値観の下、こうしたショーはしばしば「原始的」あるいは「素朴」な過去の具現と見なされ、同時にエキゾチックな「楽園」をパッケージ化して提示した。万博で異文化を体験することは、海外への観光渡航が一般化していない時代においてはとりわけ、遠い国々への旅行の代用となり得て「疑似観光」的な体験を供した。そこでは、ポリネシア文化はステレオタイプのエンタテインメントへと還元される傾向にあり、レビュー形式の興行と親和性を有している。そしてポリネシアンショーは、博覧会という西洋由来のフォーマットをつうじて日本にも普及していく。

以上のような背景を踏まえ、本発表では1893年のシカゴ万国博覧会から1970年の日本万国博覧会に至るまでの、ポリネシアのパフォーマーたちのモビリティがもたらした海域文化交渉のインパクトを追究する。日本において、ポリネシアのパフォーマンスは南洋幻想と相俟って受け入れられたが、西洋で構築されたステレオタイプの影響を受けつつも、太平洋地域、とりわけハワイとの文化接触の歴史を如実に反映したものであった。本発表は日本の地政学的位置づけを考慮しつつ、万博における自己と他者の文化表象がいかに交錯したのかを浮き彫りにする。